



©岐阜県

## 今号の内容「今年度の研究成果を紹介」

試験研究成果検討会を、本所、中津川支所それぞれ2月にオンラインで開催しました。今回は、発表の中から4つを紹介합니다。

清流の国ぎふ

### 夏秋トマト3Sシステム栽培の作期拡大における環境制御

【本所担当／浅野雄二】

当所で開発した夏秋トマト3Sシステム栽培は、土壌病害回避や密植により、地域平均の約2倍の約20t/10aの可販収量を実現している栽培法です。一方、夏秋作では簡易な雨よけハウスで栽培するため、積極的な環境制御は行われていません。

そこで、冬春期の早期定植及び加温(暖房機)と盛夏期の肩換気、ミスト散布による高温対策を組み合わせ、作期を拡大し、更なる増収を目指すことを目標に検討を行いました。

その結果、夜温15℃の積極的な加温と高温対策により、約36t/10aの可販収量が得られました。この収量は地域平均の約4.8倍となり、現地生産者が取り組んだ場合でも30t/10a程度の可販収量を得ることが可能な水準であると考えられました。

今後は適正な加温温度条件など、より収益の上がる環境制御方法について検討を行い技術確立していきます。



図 良好な着果状況

表 環境制御によるの収量及び平均果重

区	可販収量 (t/10a)	粗収量	平均果重 (g)
生育促進	35.9	38.5	140

注) 収穫期間：5/10～11/1  
可販収量はJAひだ出荷可能規格とした

### リンゴの日焼け果対策の検討 (第1報)

【本所担当／安江隆浩】

日焼け果は高温障害の一つで(図1)、果実表面温度が47℃以上、日最高気温で35℃以上で多発することが長野県果樹試験場より報告されています。飛騨地域でも過去に多発し、温暖化の進行により発生の増加が懸念されます。

そこで、果実表面温度を下げる方法として、遮光率が約10%で、強度や展張性の優れるサンサンネット1mm目(EX2000)による遮光効果(図2)について検討しました。

その結果、日焼け果発生率は低下しましたが、令和2年は糖度が下がり、令和3年は同等と、果実品質への影響は引き続き確認が必要と考えられました。

また、果面保護剤の炭酸カルシウム剤(クレフノン)の散布効果を検討した結果(図3)、発生抑制効果が認められましたが、雨で流れるため効果が不安定なことや、散布時期が7月を過ぎると早生品種「つがる」では果面に汚れが残るなどの課題が明らかとなりました。

今回の2つの方法は、どちらも2カ年の結果なので、今後も継続して調査し、効果や果実品質への影響を明確にしていきます。



図1 日焼け果の症状



図2 遮光試験の状況



図3 クレフノンを散布した果実

## アキギリの鉢花用新品種「ミライ」シリーズの最適な栽培方法の検討 【支所担当／服部哲也】

当研究所で育成したアキギリの鉢花用新品種「ミライ」シリーズは、本年度から生産・販売が開始されました。商品の品質安定のためには最適な栽培方法を明らかにする必要があるので、挿し芽及び摘心が生育並びに開花に及ぼす影響を検討しました。

「ミライ」シリーズの「ミライブルー」及び「ミライパープル」において、挿し芽を5/15～7/15に15日間隔で実施し、これに摘心0～2回を組み合わせ実施しました。その結果、草丈、株幅、花序数、花序長は、挿し芽時期が遅い、または摘心回数が多いほど、小さく、または少なくなる傾向がみられました。開花は、挿し芽時期及び摘心回数の影響が小さく、「ミライブルー」は9月下旬前後、「ミライパープル」は10月上旬前後の開花となりました(表1)。

今後は、挿し芽及び摘心が生育並びに開花に及ぼす影響の年次変動を確認するとともに、矮化剤や灌水、施肥等による影響についても検討し、栽培方法の確立をめざします。

表1 4号鉢に適した挿し芽・摘心方法

		ミライブルー	ミライパープル
挿し芽	時期	～6月中旬	～7月上旬
	回数	1～2	2
摘心	回数	1～2	2
	時期	～8月上旬	～9月上旬



図1 「ミライブルー」の挿し芽時期の違いが草姿に及ぼす影響  
(挿し芽時期：左から5/15、6/1、6/15、7/1、7/15 摘心：全て2回)

## 夏秋ナスの作業省力化を目指したネット誘引の検討

【支所担当／鈴木駿太】

夏秋ナス栽培では、整枝や収穫に労力がかかり、栽培面積増加の阻害要因となっています。

そこで、整枝作業の省力化を目的に新たな誘引方法(フラワーネット横張誘引)を考案し(図1)、収穫の最盛期をずらすための更新剪定を組み合わせた整枝剪定方法について検討しました。

その結果、ネットの規格は15cmより、上下段ともに10cm目合いを使用した方が良いと考えられました。

また、更新剪定については、可販収量は減少するものの、収穫最盛期をずらす効果が大きくなることが明らかとなりました。

作業時間については、ネットの設置と更新剪定に手間を要するものの、日常の誘引作業時間が大きく短縮され省力化が可能であると考えられました(表1)。

今後は、誘引方法の変更による他の作業への影響や、更新剪定の最適な時期などについて検討し、技術確立をめざします。



図1 フラワーネット横張誘引

表1 フラワーネット横張誘引の誘引時間 (時/10a)

誘引方法	誘引	ネット張り	更新剪定	計
慣行	407	-	-	407
ネット	139	40	32	211
時間比	34%	-	-	51%